

# へき地から挑戦する教育創生

～小規模校の特性を活かした教育と魅力的な教育環境づくりを通して～

地域の  
特色ある  
活動

## 宮崎県五ヶ瀬町教育委員会

### 1 はじめに

五ヶ瀬町は、九州の中央部に位置し、日本最南端の「五ヶ瀬ハイランドスキー場」を有する自然豊かな町である。

町内には、小学校4校、中学校1校があり、全てへき地校である。また、全国初の県立五ヶ瀬中等教育学校があり、本町中学生との交流等もある。



### 2 教育条件に関する逆転の発想

へき地である本町は、少子高齢化や過疎化に直面しており、文化施設等も十分に整っているとは言えない。

しかし、人口約3800人の町に4つの小学校と1つの中学校があること、全小中学校を結ぶ交通事情が良いことなどを強みに考えると、以下の好条件が成り立つ。

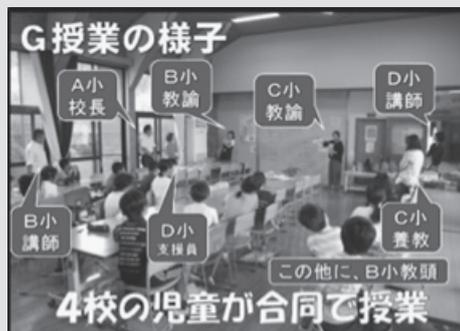
- 人口に対しての高い学校設置率
- 小規模校ならではの日常的な少人数指導
- 全小中学校による連携のしやすさ  
(各学校の教職員が連携しやすい)

### 3 五ヶ瀬でこそ優位に展開できる教育システム

#### (1) 五ヶ瀬教育ビジョン (G授業)

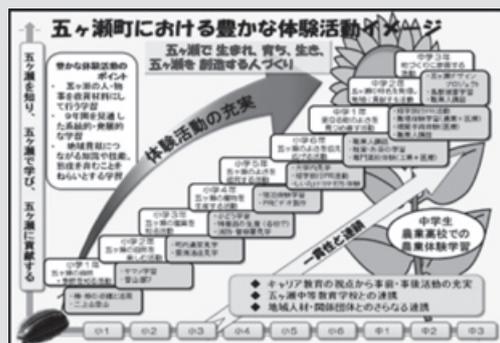
町内の児童生徒数は5校で約250名、それを見守る教職員は管理職を含め約50名いる。全体として見ると、児童生徒約5名に対して

1名の教職員が配置されている計算になり、非常に充実した環境にある。これを利用し、少人数だと効果が上がりにくい教科や内容について、町内4つの小学校から同学年が集まり、学習内容に応じた指導形態を工夫し、かつ、教師も集団でチームを組んで指導しているのが「G授業」である。町内1校の中学校については、県立五ヶ瀬中等教育学校との研究授業等での連携や、中学校教員が小学生へ指導できる体制づくりを行っている。



#### (2) ブレない教育スタンス「地域があって、子どもがいて、学校がある！」

G授業は、地域をフィールドに、五ヶ瀬町で育つ子供たちの将来を見据えている。「五ヶ瀬を知り、五ヶ瀬で学び、五ヶ瀬に貢献する」という順序性のあるテーマに沿いな



から、自立する力を小学校から中学校までの9年間を通して地域ぐるみで育てる取り組みを行っている。

教職員は、上掲のロードマップをもとに、9年間の系統の一貫性と各学年の連鎖を意識し、工夫・改善をしながら展開している。

### (3) 「豊かな体験活動」

核となる「豊かな体験活動」は、五ヶ瀬の自然や産業、五ヶ瀬で生きる人々から多くを学び得るように内容を工夫し、子供たちは、生まれ育った五ヶ瀬への愛着をもちながら、将来、五ヶ瀬に貢献できる能力と態度を培っている。例えば、

#### 【小学校6年生修学旅行における五ヶ瀬のPR活動】

五ヶ瀬のよさを伝え広げる活動として、大学構内で大学生を相手にPR活動を行う。

#### 【中学校2年生修学旅行における五ヶ瀬のPR活動】

町観光協会と連携し、東京都内の商店街でPR活動を行っている。町長から「観光特使」として任命され、自分たちが生産したお茶やシタケなどの販売を行う。



#### 【中学校3年生における「五ヶ瀬デザインプロジェクト」】

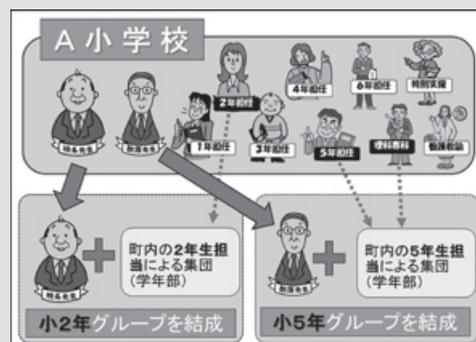
8年間余をかけて学習してきたことから自分なりに五ヶ瀬町に関する課題を設定し、解決に向けたアイデアをプレゼンテーションしている。また、町と連携して、町の取組(政策)アイデアの一つとして生かしている。

## 4 教職員の「やりがいと充実感」

### (1) 自校だけでなく管理職は町内の学年部(グループ)を束ねる

教育活動を展開していくためには、各学校が問題を共有し、町内の学校が同じ一歩で確実に前進することが重要である。各校とも校長のリーダーシップのもと、学校間の枠を超えた学年別の教員チーム(月に2回の作業部会)を編成し、目標の達成に向けて、切磋琢磨しながら活動、研究実践を積み重ね、教員一人一人の資質・能力の向上を図っている。

組織を図にすると、次のようになる。



### (2) 教員自らが希望して実施する研修

県費・町費関係なく全教職員を対象に、自らが学びたい研修を企画する「パワーアッププロジェクト」を導入している。

例えば、県内外の有名な実践家(指導教諭等)の学校で一日研修を行ったり、全国レベルの教育関係者を招聘しての模擬授業やワークショップ・講演会を企画したりしている。

当然、自分自身で研修場所を見つけ、予算を含めた計画を立てて行っている(本年度は県外出張10名、研修会を3回)。

また、本町指導主事の役割は、そのことを見守りサポートすることが主であり、必要以上の指導は行わない。

## 5 「やりがいと充実感」をもてる教育環境の創造

新学習指導要領による授業時数の増加、教員の働き方改革等の課題がある中、教員の資質や指導力の向上を図りつつ、「やりがいと充実感」のある教育環境の創造は不可欠である。

次年度に向け、教務主任会と「モジュール型教育課程の導入」「休暇を取得しやすい教育課程の工夫」等の研究を重ね、実践化していく。

新学習指導要領による授業時数の増加が、年間の授業日数の増加に結びつかないように、逆転の発想で乗り越えていけるよう、教職員と一丸となって挑戦していきたい。

教育長

猪野貴一

